みじかい解説会【みつめる野十郎】　　2021 年 11 月 6 日（土）

高崎市美術館学芸員　住田常生

高崎市美術館 TAKASAKI MUSEUM OF ART

「生誕 130 年記念　高島野十郎展」では、独学で油彩を描いた孤高の画家、**高島野十郎**（たかしま・やじゅうろう 1890－1975）を紹介します。野十郎は、ただ一本の蝋燭などに「写実」を追求する魂を込めました。昨年の生誕 130 年を記念して、新発見作品を含む 90 点によって、旅の足跡をたどるなど、新たな高島野十郎像に迫ります。今回は、物、人、風景をみつめ続け、最後に光と闇をみつめた野十郎のまなざしについて解説します。

## ①　物をみつめる

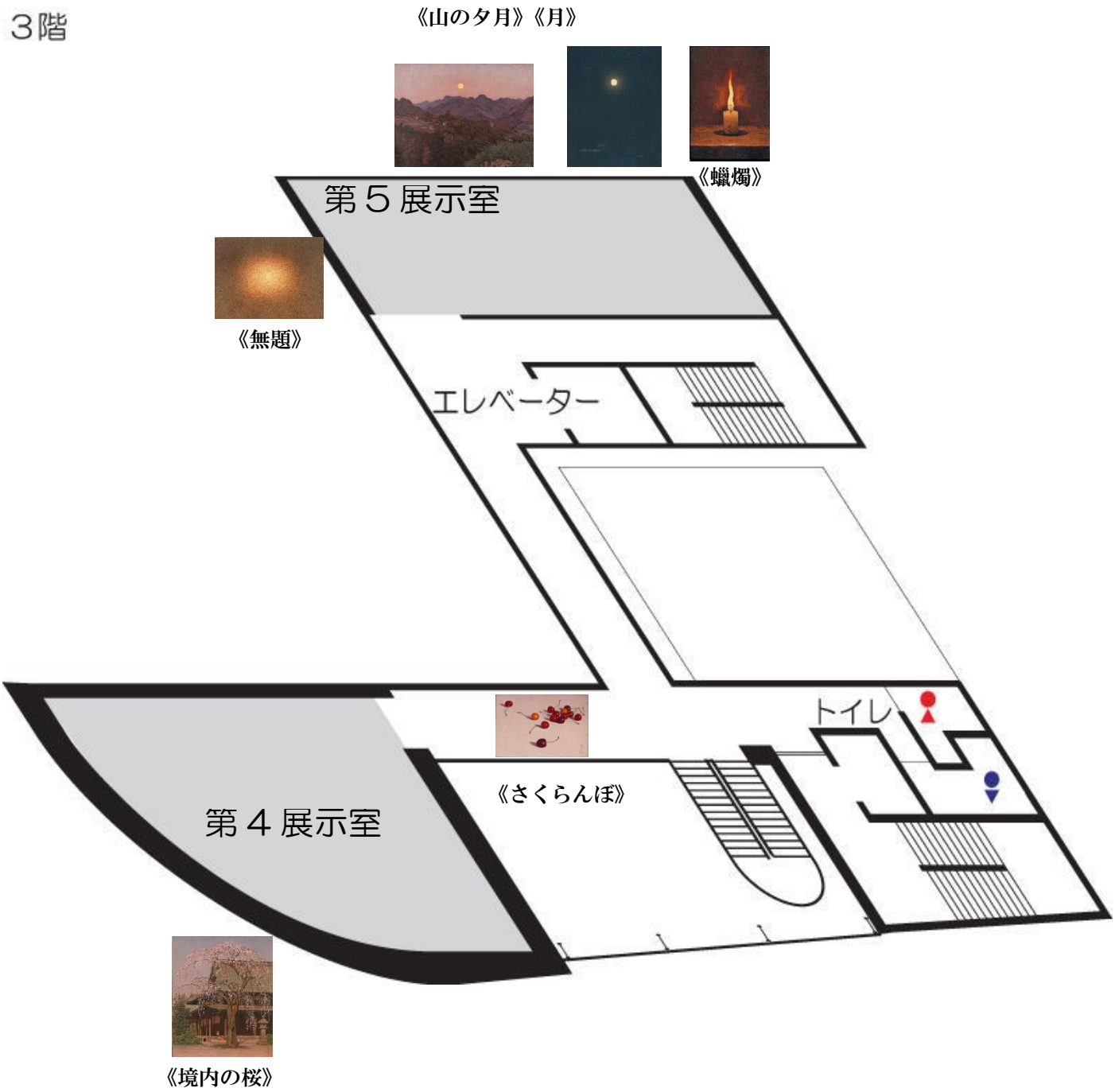
野十郎の静物画は奥行きも道具立ても少なく、好きな対象を連作します。背景の壁も皿も描かない**《さくらんぼ》**を見てみましょう。**「第一印象から最後の印象までのすべてを捉えたい」**野十郎にとって、さくらんぼの連作も第一印象から最後の印象までの道のり。この絵は同じさくらんぼを縦横二つの構図で描いたうちの 1 点で、縦の作品より小さく、さくらんぼも二つ減っています。最初の印象を縦向きに描き、画面を小さくして横向きに変えたとき、さくらんぼを二つ少なくしたのでしょう。何気なく描くように見えて、実は連作しながら、あること、見ることの変化をみつめているのです。壁さえない奥行きや、道具立てのない静けさにも注目です。**「深さとか強さとかを取るべきではない」**と記す野十郎にとって、奥行きを再現する遠近法や、実物らしい存在感を描くための写実ではないのです。では野十郎の写実とは何か、さらに見て行きましょう。

## ②　人をみつめる

自画像とわずかな肖像画以外、美しい女性像を見たという証言があるものの、人物はほとんど描かれません。しかし寺院や公園風景にしばしば母子像を描き添えます。写真を見て描くからかもしれませんが、省くこともできたはず。母子像や、世田谷、豪徳寺の臥龍桜を描く**《境内の桜》**の少女について**「菩薩の意味を込めている」**と語ったそうです。家族を持たず孤独に親しむ野十郎が、絵筆で無心に母子の姿をなぞる微笑みや詩心を見る気がします。野十郎は**「海は私のお母さん／古郷も今は無き身の海に来て／母にまみゆる母よ我がうみ」**と詩に残し、独り絵に打ち込む人生を**「近づくべからず、／親しむは魔業（まごう）」**と記しました。自由に選んだ職業ではなく、描くことは人生の魔業。故郷から離れることを選び、10 代で魅せられた油彩から離れる自由を選ばなかった業の深さを魔業と呼ぶのでしょう。**「人生というのはさびしいものだなあ」**とも言ったそうです。1960 年、東京五輪による拡張工事のため、70 歳で千葉県柏市増尾に移り住み、電気、ガス、水道もなくランプと井戸で暮らし、野菜を育て、睡蓮の池を作り**「ここは俺のパラダイスだ」**と語ったとも伝わります。孤独に親しむ野十郎の語る「さびしさ」とは、26 歳で死に別れた母を慕う心であり、人の世に寄り添い、独り微笑みながら歩む道ではないでしょうか。

## ③　光と闇をみつめる

**「在るに非ず、また在らずに非ざるなり」**が口癖だった野十郎は、やがて空や空気、闇など目に見えないものを描こうとします。それはある、ない、と単純に言い切れない世界。**《無題》**は闇を描くため目を閉じた様子といい、確かにまぶたの裏の残像のようです。見えないからこそ闇ですが、目を閉じ闇をみつめることは、心の奥の光をみつめることでもあると。実は野十郎がつけたタイトルは《―》。光とも闇とも、有とも無とも言い切れない、言い知れない何かです。**《山の夕月》**は月の連作の最初の作で秩父三峰の夕景。光が月の奥へ深まるように感じます。ノートに記された短歌**「夕暮るゝ昼の姿の黒々と／たゞ一すぢに明け渡りゆく」**の「黒々と」「明け渡る」という対句が、そのままこの絵の地の闇と天の光を想像させます。空は背景で月や集落が主題というへだてなくタッチを重ね、夕空にさえ濃密な手触りがあります。晩年、ついに空に浮かぶ**《月》**だけを描き**「月は闇を覗くために開けた穴」**だと語ります。闇をみつめるためには光を、光をみつめるためには闇をみつめる。それが野十郎の写実であり、心模様なのです。**《蠟燭》**の連作も心模様を明かします。大正時代からほぼ同サイズで描かれ、現在 56 点知られる《蠟燭》は、知人に渡すためだけに描かれた「絵馬」のような連作。野十郎が 1 点だけにつけたタイトルは《不知題》。無題ではなく、題を知らない。自分だけの絵ではないということ。実際の蝋燭を見て描いたといいますが、やはり心の奥の光。炎を縁どりゆらめく灯、流れる時、光と闇。ひとときの蝋燭の灯を、ただ一つの永遠の姿に描き、心許す人に手渡しました。しかし本当は私たちすべてに手渡された灯です。なぜなら野十郎は**「寫実の極致、やるせない人間の息づき―それを慈悲といふ」**のですから。野十郎の写実とは、人の世に変わらぬ慈しみと悲しみを、みつめるまなざしだったのです。

「みつめる野十郎」
展示室のご案内

３階